

真夏の大臣杯。2部から堂々の3位



REPORT

苦しさ乗り越え掴んだ3位

前期リーグの最後の2試合を1分1敗と嫌な流れのままこの大会に臨んだ駒大。鹿屋体育大との1回戦も先制点を許してしまうなど苦しい展開を強いられる。しかし、この試合を若山の劇的逆転弾で勝利すると、続く2回戦は四国の強豪・高知大にPK戦で勝利。リーグ戦で見せていたような不甲斐ない姿はもうそこにはなかった。

そして、この大会最大のハイライトは何といっても準々決勝の筑波大戦だろう。圧倒的にボールを支配され、ほとんどの時間を自陣で過ごす中、1-1で迎えた74分。背番号10を背負う湯澤の度肝を抜くロングシュートで逆転。選手達はこれ以上ない笑顔を見せた。これで決勝進出も見てきたかと思われたが、専修大との準決勝では1部で優勝を争う相手に6失点と為す術なく敗れた。

専修大との試合こそ完敗だったが、2部のチームが全国大会で3位という結果は十分胸を張っていい。残す目標は昇格のみだ。

Results

1回戦	2回戦	準々決勝	準決勝
@J-GREEN 堺 VS 鹿屋体育大 2 - 1	@J-GREEN 堺 VS 高知大 1 - 1 (8PK7)	@J-GREEN 堺 VS 筑波大 2 - 1	@キンチョウスタジアム VS 専修大 0 - 6

COLUMN



試合毎に得た“一体感”をリーグ戦でも

“駒大らしさ”。それは全員がハードワークし、泥臭く勝利をつかみ取るスタイルを意味する。準決勝では大敗を喫したが、今大会で見せた戦いぶりはまさにその“駒大らしさ”が出ていた。鹿屋体育大との1回戦はロスタイムに逆転、高知大との2回戦では同点に追いついてからPK戦

で勝利。さらに、3回戦では筑波大を相手に逆転勝利を収めた。いずれの試合も相手にボールを握られる展開だったが、全員が集中を切らさず走り続け僅かなチャンスをモノにした。得点が決まる度にベンチも一緒に湧き上がり、チームの一体感は日に日に増していった。

この一体感をリーグ戦にも繋げていきたい。首位との勝ち点差は「7」。『1部昇格・2部優勝』という目標に向けて不可能な数字ではないが、決して楽な数字でもない。ここからは1試合1試合をトーナメント戦の様な気持ちで戦わなければ目標を達成することは出来ないだろう。そのためにも全員の気持ちを同じ方向に向けなければならない。当たり前かもしれないが、前期リーグでは全員の意思がどこかバラバラな試合があり、勝ち点を落とす事もあった。

専修大との準決勝の試合後、2年生のDF平尾はこう語った。「(この総理大臣杯で)4年生に優勝させてあげたかったけど出来なかった分、(リーグ戦で)1位をとって優勝したい」。この気持ちは決して平尾だけではないだろう。こういった1人1人の気持ちが試合の厳しい場面で原動力となり、大きな結果を引き寄せるはずだ。

(紙面編集:猪熊脩登)